昭和学院及び中学校・高等学校

第一節　昭和学院の揺籃期

一、教職は天職なり

本学院創立者伊藤友作先生は、明治十四年三月二十二日、千葉県市原郡菊間村草刈（現・市原市草刈）に生まれ、生来頭の良い、学問好きなところから、教育者として生きようと決意し、明治三十八年三月千葉師範学校を卒業後小学校訓導に就任し、その後市原高等女学校、銚子商業学校、松戸高等女学校、千葉商業学校など公立学校を歴任、二十八年間に亘り全力を教育に傾注された。その勤務ぶりは他の模範で、勉強家であった先生は、公務の余暇に日本大学高等師範部に学び、文検教育科に合格された。だが、千葉商業学校長を最後に、昭和八年三月退職された。教職を自己の天職と信じておられた先生には、その退職はなお自己の宿願を全うできなかったという悔いがあったようである。

この時代、多くの老人は職を退き隠居して余世を送るべき六十歳にして、自己の教育理念を実践するため私学設立を計画され、昭和十五年一月二十三日、昭和女子商業学校を設立された。誠に偉大なことである。戦時体制下にあった当時は、女子に職業教育を施し、男子と共に国家社会の為に寄与できるようにすることが要請されていた。そこで先生は永年に亘る公立学校での商業教育及び女子教育の体験を活かし、女子の社

会的地位の向上を図り、理想的な教育を施そうと女子商業学校を設立された。

二、昭和女子商業学校の誕生

開設にあたって一つの重要な問題は、校地の選定であった。学校の敷地としては、相当広大で将来拡張の余地があり、しかも地の利を得る所でなければならない。こうした観点から、現在のこの菅野の地に決められたが、今から考えれば先見の明があったといえよう。現在地は東京と千葉の接点にあたり、交通の便もよく緑豊かな住宅地で、学園に好適な場所である。

学校設置の母体である財団法人の設立と、学校設立認可申請書類は、全部伊藤友作先生自ら作成され、県や文部省へ奔走され、その御苦労は計り知れないものがあった。これらの書類は、昭和十四年八月二十三日付で、文部大臣宛で市川市役所を経て千葉県へ提出され、文部省に進達された。文部省での厳密な審査の結果、漸く翌十五年一月二十三日付で時の文部大臣松浦鎮次郎氏の名で、財団法人及び学校設置を認可され、又同日付で伊藤友作先生を校長として認可された。ここに本学院の前身である昭和女子商業学校が誕生した。

三、昭和女子商業学校の学則

1、目　的

実業学校令及び商業学校規程により、女子に必要な商業教育を授けると共に、家庭の人として婦徳を実践し得

る中堅婦人を養成する。

2、教育方針

(1) 忠孝両全の国民を養成すること。

(2) 実用主義の教育を第一義とすること。

(3) 明敏にして謙譲なる人物を養成すること。

(4) 強健なる身体を作る教育をなすこと。

3、修業年限

四年

4、入学資格

第一学年は、尋常小学校卒業者又は年令十二年以上で、之と同等以上の学力ある者。第二学年以上は相当年令に達し、相当の学力ある者。

四、感激の日――第一回入学式――

設立認可と同時に、予め用意した入学案内を広く付近の小学校に発送した上、校長自ら各小学校に足を運び、入学生の推薦を懇請した。入学考査は、二月四日（日）と三月四日（日）の両日に亘って行われた。募集人員一五〇名に対し、三六二名もの志願者があったといわれる。なお、校舎新築中のため、入学考査場には、近くの市川市立八幡小学校を借用した。

創立当時の伊藤友作先生

こうして、昭和十五年四月一日に開校、八日、木の香芳しい新校舎に入学生を迎え、晴れの第一回入学式を挙行した。式には、多数の来賓をはじめ、入学生の父兄母姉が参列して、盛大のうちに終了することができた。ここに昭和学院の歴史がはじまった。

五、木の香の薫る学び舎の落成式

昭和十八年三月三十一日、第四期校舎新築工事が竣工したところで、同年十一月十四日昭和女子商業学校校舎の晴れの落成式が挙行された。

伊藤学校長挨拶

顧みれば本校創設以来茲に三年有半、創設当時は支那事変の真最中であり、其の後大東亜戦争に進展今や其の決戦段階にあります。此の未曾有の非常時局に鑑み、関係各位を招待する挙式は未だ致さず以て今日に到りました。而して本年三月第四期新築工事落成を告げ、予定の延坪千百坪の校舎の完成を見ましたが、時局の進展に伴い物資愈々欠乏、其の完成には苦心惨憺言語に尽し得ぬものがありました。かかる時局

昭和女子商業学校校旗

に際し予定の新築工事を終了せしことは偏に文部省当局本県当局の御指導と、父兄並びに其の他の方々の御後援の賜で洵に感謝に堪えません。尚父兄各位には、新設の本校に最愛の子女を御送り下され、感銘措く能はざるものがあります。時局は愈々進展して何時平和克復を見るや計り難くありますが、本校創設乃至校舎新築に多大の関係ある各位に対し、此の機会に感謝の微意を表するは極めて必要のこと、思い、茲に聊か新築落成式を挙げ一言御挨拶を申し述べ、併せて倍旧の御指導御後援を懇願致すと共に、職員生徒一同及ばずながら粉骨砕身一段の奮励を以て、御厚志の万一に報いんことを期する次第であります。

落成式祝歌

この祝歌の歌詞は次の通りであるが、昭和二十四年三月に女子商業学校が廃止され、新学制の全面的な実施に伴い、本学院校歌と定められ、その歌詞の一節「木の香のかおる」を「昭和と名のる」と改めた。さらに、昭和四十年十月、創立二十五周年記念式典を迎えるにあたり、その歌詞の一節「創設浅く」を「理想は高く」と改め、また平成十五年四月男女共学を機に「少女子ら」を「若人の」に改めて、現在なお歌い継がれている。

校歌は校旗とともに、学校の象徴であり、生徒の愛校心を育てる上で、その果す役割は大きい。軽快な、明るい感じの曲で校訓の「明敏謙譲」のこころを歌いあげている。

落成式祝歌

作詩　伊藤一郎
作曲　坂本通弘

一、言の葉伝ふ　真間川の
　流れたゆとう　菅野辺に
緑さやけく　萌え出でて
　気高くかおる　若草の
我が学舎ぞ　きよらけき

二、明け行く空に　富士の嶺の
　紅匂う　朝霞
歴史を秘めて　松千とせ
　夕映え清く　風渡る
我が学舎ぞ　うるわしき

三、創設浅く　学深し
　真理尋ねて　少女子ら
木の香のかおる　この窓に
　月の桂も　手折らなん
我が学舎ぞ　彌　栄ゆ

第二節　高等教育への出発

一、新学制への移行

昭和学院中学校開設

戦後の新教育制度の下で、本校でも昭和二十二年五月十七日、昭和学院中学校として新制中学校の設置が認可され、同日開校された。

当時は、戦災の廃墟からやっと復興のきざしが見えはじめた頃で、公立の中学校においては校舎は狭少で施設、設備が不十分であった。それに比べ本校は、校舎も整い、施設、設備に恵まれていたため、本校への入学志願者が非常に多く、入学は狭き門となった。そのため、各小学校では優秀な卒業生を送り込んできた。従って入学できた者には品行方正・学業成績優秀なる生徒が多く、相当に程度の高い学校となった。こうして見通しの明るい開校となった。

昭和学院中学校の開設に伴って、従前の昭和女子商業学校の一、二、三年生徒は、中学校の一、二、三年に移行した。過渡期として、昭和女子商業学校は四年生徒を残すだけとなった。なお、六・三制による学制

の改革、入学者数の増加は、戦後における私学発展の大きな力となった。

昭和学院高等学校開設

さらに、昭和二十三年四月には昭和学院高等学校が開設された。高等学校には、当初、普通、商業、家庭の三課程を置いたが、昭和三十一年度に家庭科を廃止し、平成六年度には商業科を廃止し普通科のみとなった。

二、風雪越えて薫るこの日

さらに昭和二十五年小学校、短期大学が開設された。昭和二十五年十一月十二日、創立十周年の式典が、多数の来賓、父兄の参列のもとに、十年の短期間のうちに小学校から短期大学への一貫教育の学校体系が整ったという、本学院の驚異的な発展を祝福して盛大に挙行された。晴天のもとに挙行された式典、展覧会、学芸会は記念行事にふさわしく誠に意義深いものがあった。本学院関係者はこの総合学園によって更に地域社会の文化の向上発展のために、一段と教育への決意を新たにした。